

関係における意味としての「仏陀」

——「教巻」に顕われる親鸞の仏陀観と

真実の教の決定——

藤 場 俊 基

筆者が『顕浄土真実教行証文類』（以下「教行信証」と略称）の研究に着手した時、最初に懐いた疑問は、「教巻」をめぐる以下の三点である。

①なぜこのように短いのか。  
②「大無量寿経は真実の教である」ことの説明になっていないのではないか。

③なぜ「大無量寿経」であって、それ以外の經典ではないのか。このような疑問はあまりにも素朴で、真宗教学研究においては自明のことであるのかも知れない。しかし、初学者の疑問に学界の常識をもって答えたことにしたり、まして愚問として、問そのものに切り捨ててしまうようなことは誠に慎むべきであろう。いかに確立された常識であっても、一人の問の前には検討の対象となる。一二〇一（建仁一）年、二十九歳の親鸞は比叡山を下りる決断をした。決別の決断を可能にするものは絶望か、あるいは新たな可能性への確信である。親鸞の決断が絶望のみを意味するならば、山との決別にとどまらず仏教との決別であったはずである。しかし、その後の親鸞の歩みは、仏教と決別した者のそれではな

かった。むしろそれは「仏教」を選び取ったという確信に満ちたものである。親鸞の下山は、山で「仏教と呼ばれていたもの」との決別を意味する、と同時に「仏教」の可能性への確信が形成されていたことを意味している。

親鸞が可能性を確信した「仏教」は、山で「仏教と呼ばれていたもの」への断念を必然する、まったく異質なものであったはずである。「仏教」観のそのものに起因する根本的な問題を見出したが故に親鸞は下山を決意し、法然の門をくぐったのであろう。

「教巻」は単に最初の巻というだけでなく、『教行信証』という書物全体の性格を決定付ける役割があるといえよう。そこに必要とされることは「教」の内容自体を説明することよりも、むしろ「教」とはどのような事柄としてあるのかという「教」観を明確に示すことであろう。したがって、親鸞が決別した「山で仏教と呼ばれていたもの」と選び取った「真実の教」としての「仏教」との決定的な違いは、この「教巻」においてこそ明白にされなければならないと考える。

一 「夫れ真実の教を顕さば則ち大無量寿経是なり」は「大無量寿経は真実の教である」を意味するか

この点に関して注目すべきことは、「教巻」自釈の「スナハチ」に「則」の字が用いられていることである。親鸞には用字において極めて厳密な姿勢が見られる。「即」と「則」についても明確に意識化された区別がある。

「則」は「くならば、必然的にくである」という必然的帰結を意味する用語であり、その接続関係は不可逆的である。したがって親鸞の用字に忠実になるならば、「夫れ真実の教を顕さば、則ち大無量寿経是なり」は「真実の教を顕すならば、必然的に大無

量寿経こそが「そうである」という解釈は可能であるが、「則」の字による接続の不可逆性は「大無量寿経は真実の教である」という解釈を否定する。

「夫れ真実の教を顕さば則ち大無量寿経是なり」は、親鸞においてそれ以外の選択があり得ないことと、それ以外の選択は不要であるということの表明であり、「真実の教として『大無量寿経』を選び取る」ことである。その意味における主体的決定は、他者の主体的選択と決定の余地を否定するものではない。むしろ自らの主体的決定の表明は、それを承けた者に対して同様に自身の主体的決定をせまる。いかなる命題であっても、客観的真実性を主張するならば、その論理と根拠が万全であればあるほど權威性を生じる。權威は主体的判断力を奪うものとして機能する。

「教巻」における「真実の教の決定」とは、『教行信証』に對面する姿勢として、読者にも自身の主体的「真実の教の決定」をせまるものに他ならない。

## 二 引用文の構成とその解説

「教巻」には『大無量寿経』の「発起序」の最初と最後のごく一部を除いて、中心的な部分のほとんどが引用されている。『如来会』と『平等覚経』からは「発起序」の限られた部分が抜き出されているだけである。この三つの經典の引用の構成を検討すると、論点が絞り込まれていく展開、すなわち『平等覚経』の、「仏に値遇し難いこと」と、「仏が世に出現する」という二点に主題が収斂していることがわかる。このような引文の展開は、「教巻」における「真実の教の決定」が「具体的な相として世に出てはたらく仏陀」という仏陀観に基づくものであることを意味しよう。

親鸞は『教行信証』において、通則に基づかない加點、左右の

施訓などの「注意喚起」を表現手段として駆使しているが、「教巻」にもそうした手法は多用されている。とりわけ『平等覚経』における訓み換えは注意すべきことがある。

詳細な検討は省略するが、『大無量寿経』の「発起序」の「今日」において初めて阿難は仏陀を見出したということを物語っている。この「今日」までは、阿難とゴータマの関係において、仏陀という意味は成立していなかった、つまり阿難は積尊に常に随行していたが、それはゴータマ・シッタータなる人物と同行していたということではあっても、「仏陀」に随行するという意味は成立していなかったのである。すなわち、ゴータマ・シッタータという人格と「意味としての仏陀」は即一ではないということを「教巻」に顯われている仏陀観は示している。

「仏陀」は人格として措定されるものではない。他者と無関係に「仏陀」なる存在が居るのではなく、仏陀を見出す者、すなわち仏弟子の誕生と仏陀の出世は同時である。したがって、「ゴータマ・シッタータは仏陀である」という命題は固定的には成立しないのである。「仏弟子」と「仏陀」は相互反映的に相互規定される「意味」として成立するのである。

親鸞は、このような「関係における意味としての仏陀」をその「発起序」において明らかにする『大無量寿経』をこそ、初めて「仏陀の教」として選び取ったのである。ここからまた、「行巻」の主要概念である「諸仏」も、「仏陀なる意味」が成立するところに「仏陀」は出世するという、特定の人格に限定されない仏陀観に基づいて意味付けされる必要があると考える。